

令和4年度 第2回「琉球文化ルネサンス」に関する万国津梁会議 議事録

(1) 会次第等

令和4年度 第2回「琉球文化ルネサンス」に関する万国津梁会議 会次第

日時：2022年9月14日（水） 14：00～16：00

場所：沖縄県市町村自治会館 2階大会議室

1. 開会・あいさつ
2. 第1回会議の振り返り 【資料1】
3. 報 告 【資料2】
 - (1) クイチャーの次世代継承に向けた取組
 ゲストスピーカー：前里昌吾氏（クイチャーフェスティバル実行委員）
 - (2) ヒアリング・調査結果
4. 議 論 【資料3】

議題：提言のとりまとめの方向性と今後の進め方
5. 閉会・事務連絡

(2) 出席者

■委員

氏名	分野	職名等	出欠
波照間 永吉	文学	名桜大学大学院 国際文化研究科 教授	○
山里 勝己	文学	名桜大学大学院 国際文化研究科 教授	○
大田 静男	歴史	八重山歴史・芸能研究家	○
上里 隆史	歴史	琉球歴史研究家	○
いのうえ ちず	文化	雑誌「モト」編集長	○
富田 めぐみ	伝統芸能	合同会社琉球芸能大使館 代表 舞台演出家	○
嘉数 道彦	伝統芸能	沖縄県立芸術大学 音楽学部 琉球芸能専攻 准教授	○
小渡 晋治	伝統工芸	(株)okicom 常務取締役 琉球びんがた事業協同組合 特別顧問 「琉球びんがた普及伝承コンソーシアム」事務局長	欠席
久万田 晋	民族音楽/民俗芸能	沖縄県立芸術大学 芸術文化研究所長 教授	○
知念 賢祐	空手	沖縄空手道古武道連盟ワールド王修会 会長	○

■ゲストスピーカー

氏名	役職
前里 昌吾	クイチャーフェスティバル実行委員

(3) 議事録詳細版

1. 開会・あいさつ

【事務局】

委員の皆様こんにちは。

会議を始める前に、本日の出席状況についてご報告いたします。本日は、10名中9名の皆様にご参加いただいております。小渡晋治委員は、業務の都合により本日はご欠席となります。また、本日は県の関係課として、文化振興課、ものづくり振興課、空手振興課が参加いたします。

そして、本日は、地域における伝統文化の普及・継承に向けた取組事例として、宮古島で2002年から開催されているクイチャーフェスティバルの立ち上げに携わるなど、伝統クイチャーの保存・継承、創作クイチャーの発信に取り組んでおられる、クイチャーフェスティバル実行委員会委員の前里昌吾さんをゲストスピーカーにお招きし、ご自身の取組などについてお聞かせいただくこととしております。

それでは、これより令和4年度第2回琉球文化ルネサンスに関する万国津梁会議を開催いたします。

それではこれより議事に移りたいと思います。波照間委員長、よろしく申し上げます。

2. 第1回会議の振り返りについて

【波照間委員長】

皆様こんにちは。本日は、琉球文化ルネサンスに関する万国津梁会議の令和4年度第2回目の開催となります。先程事務局からも説明がありましたが、今回は宮古島からゲストスピーカーにお越しいただき、離島における伝統文化の保存・継承に関する現状や課題などについてお話をお伺いしていきたいと思っております。それでは会次第に沿って、進行したい

と思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。2時間の予定でございますが、お手元資料をご覧のようにかなり大量になっております。スムーズに進行できますようご協力下さい。

それでは、第1回会議の振り返りということで、事務局より報告をお願いいたします。

【事務局】

資料1 説明（省略）

「その他のご意見」のうち、「ウチナーンチュ大会と関連させた取組」の部分につきましては、海外の沖縄県人会からお話が聞けないかということで、県の担当課と調整をしているところです。次回の会議で報告できるかと考えております。

また、空手の継承の部分につきまして、前回の会議で委員長から県の考え方などについてご質問がありましたので、今回、空手振興課から沖縄空手振興ビジョン策定の目的や概要などについて説明します。

【空手振興課】

皆さん、こんにちは。前回、委員からもご意見がありました件に関し、空手振興ビジョンや次世代へのバトンタッチについて、海外へのスポーツ空手と伝統空手の継承いずれを推進するかについて県の考え方を説明致します。

空手振興課説明資料4ページの資料をご覧下さい。2018年3月に沖縄県空手振興課で策定したものです。4ページの図に基本理念として3つの柱がございます。1点目の保存継承の部分については、先人の残した文化である空手を次世代に継承するところが大きな目的となっております。2点目の普及啓発は、沖縄空手のブランド化に向け、競技空手と伝統空手を両方連携させながら、空手のブランド化を図っていくことにしております。それ

から3点目が振興発展です。空手の聖地化を確立し、経済的にも恩恵を受けられるように色々な施策を検討しているところです。こちらの計画が20年後を目標とした振興ビジョンとなっており、5年ごとにその取組についてのロードマップを策定しております。今年は今年度から始まる5年間の第2期ロードマップについて議論しているところです。2ページ目にありますが、ビジョン策定の意義としては、沖縄の空手が世界の宝であり、保存継承、発展させるために官民、それから空手界一体となってビジョンを策定することになっております。現在の30代40代の空手家が中心となり、20年後、50代60代になった時に空手の指導普及を担っていく人材になりますので、その人達がありたい姿を実現して行くようなビジョンになっています。第2期ロードマップを策定においては、要となる次世代の空手家30代40代でワーキングチームを作り、そちらで出た意見を、保存継承、普及啓発、振興発展という3つの親部会にて議論し、それから更に策定委員会と上部の委員会に上げて、最終的に次期取組を決めていくというところであり、次世代の方々が流派・会派を超えて交流することで、今後の空手振興のエンジンになっていくのではないかと考えております。県としても、この方々が海外に出て行く時に、今の第一線で活躍している50代60代70代までの先生方と同じように活躍できるような場を作り支援していきたいと考えております。

次に、伝統空手と競技空手との関係なのですが、4ページに「沖縄空手のブランド化に向けて伝統空手を確実に継承しつつ」が基本ではあるのですが、「競技空手についても推進し、子ども達に夢を描かせ、世界に向けて空手の聖地沖縄を普及啓発する」としております。例えばオリンピックで活躍した喜友名選手を見て、子ども達が「かっこいいな」とか

「そうなりたいな」と思うのは自然なことであり、そこで空手に関心を持ってもらうきっかけにはなるのだろうと考えております。競技空手の人達が、そのルーツである沖縄の伝統空手をリスペクトしたり、支援する立場にまわったり、将来的に伝統空手をやりたいという方もこの中から出てくるので、関心を持ってもらうきっかけになるものとして、普及啓発という分野の中に入れております。ただし、その基本となるものは、空手の聖地、空手発祥の地沖縄に、伝統空手がそのままの形で残っているということが重要ですので、沖縄県としては、型の保存継承を一番重点に考えております。課題として、沖縄の先生との師弟関係もなく、ビデオで学習した方が海外で「沖縄空手を習ってます」として指導しているという話も聞いていますので、その辺の対策については、沖縄県としても考えていきたいと思っています。

前に委員からありました「海外に対して分かりづらい」「どちらを県がやろうとしているのか分かりづらい」という点につきましては、第2期のロードマップの方で、伝え方や発信の仕方をもっと少し検討していきたいと考えております。以上です。

【事務局】

事務局からの説明は以上になります。

【波照間委員長】

どうもありがとうございました。ただ今、事務局、そして空手振興課からも補足の説明をいただきました。ご意見ご質問等ございましたらいただきたいと思っております。

先ほど知念さんから手が挙がったかと思っておりますので、知念さんどうぞよろしく願います。

【知念委員】

先ほどの説明に対して、疑問な点を聞きた

いと思います。

今の話では、競技も伝統も大事だという事で、結局はミックスして伝統も活かすし競技も必要だということなんでしょう。僕は50年近く海外で教えていますが、伝統から競技に移るのも、競技から伝統に移るのも非常に難しい。長年やってきた技が同じであれば移行できると思います。皆さんは空手をやっていらっしゃるから、小さい時はスポーツ的にやって、後は本人が選んで伝統の好きな人はそれに移行するという考えなんでしょうけど、基本何十年もやってきた技を今日からこれに切り替えることができるかどうかですよ。色んな先生方と会って話をしていますが、両方出来ている人を僕は見たことがない。また、海外でも沖縄連盟とか色んな組織がありますが、そこでも伝統の技と競技を同時に進めているところがあるかと言えば無いです。大体相反していて、スポーツの練習方法と伝統で人間形成をするのでは、技自体が違うんですよ。簡単に言えば、競技の方はどうしても勝ち負けですよ。スポーツですから、技も同じでなければいけないので指導はコーチでもよいのです。でも、伝統はコーチでは間に合いません。師弟関係が生じて師弟が繋がって組織も出来上がり、道場経営もそれに関係してくる。スポーツとは全然違った形態になってしまうので、教育も技も違ってきます。伝統においては技が違うというのは大きな問題なんですよ。伝統として続いてきた事が一つの本流であれば枝葉が出て、競技が発展したということなんですけれども、本流の伝統を基軸にしながらかその枝葉の競技が成り立つかというそれは僕は見たことがないです。色んな所でセミナーを行って来ていますが、やはり伝統か、競技かです。競技はコーチが同じ組織の中にいれば同じものを教えずにはいけないという一つの決まりがあるが、伝統は同じ先生でない限り、弟子が違っても先

生が違っても師弟関係というのは非常に強く、技も教え方も信頼関係もそのあたりから始まり、剣道であれ柔道であれ大体同じです。ただ、僕が心配しているのは、日本の柔道のように、武道としてオリンピックに出ているから、沖縄でも可能じゃないかというのは違うと思うんです。柔道は元々日本にあって、日本の本流から枝葉が分かれています、空手の本流は沖縄でも枝葉が分かれていますのは本土なんですよ。大学空手が確立して段々大きくなっていくと、本土の方が主体になり、結局は「庇を貸して母屋を取られる」という形にならなければいいんですけど、伝統というのは本当に守れるかどうか。空手振興課へ質問したのは、それははっきりさせないと将来的には大きな問題になる可能性があるということがあったからです。海外の人達にも伝統ある沖縄で大会があるけど、スポーツなのか何なのか聞かれる。スポーツでなければ行かないという人もいるし、伝統であれば行くという人もいます。本場という沖縄が本当にそういうことを受け入れ出来る状態にあるかいうと、結局はどっちつかずというか我々自体が聞きたいんですよ。僕はどっちでもいいというわけではないけど、伝統でやるか競技でやるか、または両方ミックスしていくのか、この3つからちゃんと割り出して、それをモットーに目標を立てていかないと、ただ、今の時代に流されながら何とか生きていくのではないかという。30代が将来今の70代80代を引き継ぐだろうという話ですけど、僕はそう思わない。伝統があつての今の競技でもあるから、結局今の70代80代を大事にしない限り、将来の伝統には繋がらないと思う。小さい子ども達、青年または壮年、そして歳取られた方達の四世代が繋がっていかないと沖縄の空手は魅力もないし、これらを世界に発信という国際的な話をよくされますが、程遠いと思います。

僕が言いたいことは、繰り返しになります
が、要するに将来の目標を持ってちゃんとや
って欲しいという話です。以上です。

【波照間委員長】

どうもありがとうございました。空手振興
課のほうにも色んな諮問機関、会議等あるか
と思います。万国津梁会議において、空手に
携わっている委員からこのような意見があっ
たということをお伝えいただくなり、活かし
た議論をしていただけるようになるにとよろし
いかと思いますので、善処方お願いいたしま
す。

それではほかに第1回会議の振り返りにつ
きまして、疑問等ございますか。もし、ござ
いませんでしたら、先に進みたいと思います。
次は報告ということで、クイチャーフェステ
ィバルの取組について、宮古島から前里昌吾
さんにおいでいただいております。民俗芸能
の継承をする観点から、クイチャーフェステ
ィバルの事例についてお話していただきたい
と思っておりますが、まずは事務局からご説
明お願いいたします。

3. 報 告

【事務局】

資料2 説明（省略）

前里氏 経歴紹介（省略）

それでは前里様にクイチャーフェスティバ
ルに関わった経緯、ご自身の熱い思いも含め
ながら取組のご紹介をよろしくお願いいたし
ます。

【ゲストスピーカー：前里昌吾氏】

皆さん、こんにちは。宮古島から来ました
前里昌吾といいます。よろしくお願ひします。
大田さんに紹介していただいたみたいであり
がとうございます。

先日、宮古島で聞き取り調査に参加させて

いただいて、私自身も過去の経験を振り返り
ながらお話をさせていただきました。今日はそ
の内容をお伝えしたいと思います。

クイチャーの普及に私自身が力を入れたの
はつい最近ですので、こういった貴重な場に
呼んでいただいたこと、すごく感謝しており
ます。本当にありがとうございます。

最初に、私の経歴からお話させていただきます。
生まれは1973年で復帰の1年後に宮古
島で生まれました。宮古島市は1つになって
いますが、当時は平良市のイーザトと呼ばれ
る繁華街の真ん中で生まれました。その当時
上野村、城辺町、下地町、多良間村、伊良部
町の6市町村あったんですが、私の生まれ育
った平良市は、クイチャーの保存会が近くに
なく、クイチャーは運動会で年に1回踊るぐ
らいでしかなく、身近ではありませんでした。
普通にアイドルやロックミュージックを聴い
て育て、18歳より2年間、那覇市の専門学
校通うため島を出て、20歳に宮古に戻ってき
ました。23歳の時に、琉球国祭り太鼓が宮古
に支部を作る話があり、立ち上げのメンバー
だった僕の叔父に声を掛けられ説明会に行き
ました。エイサーも宮古にはありませんでし
たが、現在、創作芸能団レキオス代表として
活躍している照屋忠敏さんが、祭り太鼓の中
枢として宮古島支部の立ち上げに来ていただ
きその演武を見て感動してエイサーを始めま
した。母親が琉球舞踊の教師をしているので、
芸能は多少身近にありましたが、全く興味が
なく、実際に芸能というものに携わったのは
23歳でした。それから、宮古島になかったエ
イサー文化にのめり込んで、6年後クイチャ
ーフェスティバルが2002年にスタートしまし
た。地元のミュージシャンの下地暁さんが中
心になって立ち上げたんですけども、祭り太
鼓宮古支部として楽曲提供をいただいたりと
いう付き合いがありました。

なぜ暁さんがクイチャーフェスティバルを

始めたかと言いますと、運動会でもクイチャーが全く踊られなくなり、段々エイサーに移行していた。エイサーについては自分も少し責任を感じていたのもありますけれども、本当に各地域でクイチャーを知らない子ども達や踊った事がないという子ども達が増えてきたことを懸念して始められました。そこで、各地域の保存会を集めてやるだけのイベントではなく、子ども達にも興味を持ってもらえるイベントにするため、創作クイチャーの部を設けるので協力して欲しいと（下地さんより）言われたので、祭り太鼓宮古支部のメンバーでクイチャー用の別団体を作って第1回目から参加しました。12回目までは、創作クイチャーを作る、振り付けをする立場で携わっている中で、多少ほかの保存会の皆さんと話をしたり交流もあったんですけども、2014年の第13回から下地暁さんの後を継いで、第2代実行委員長となり、クイチャーフェスティバルの運営を任されました。それから若いメンバーが増えてきたので3年前の第19回を最後に第3代に引き継いで、今は実行委員の企画運営でクイチャーフェスティバルに携わっています。3年振りに今年21回ということで11月に開催する事が決まっています。

クイチャーフェスティバルに携わってきた中で、色んな現状が見えてきました。残念ながら現在、宮古島では図書館などに行ってもクイチャーに関わる資料がほとんどなく、先輩方から聞き取った情報しかありません。下地暁さん（現在60代）が幼少期の頃は、少なくとも百以上はクイチャーが存在していたということでした。各地域各字にクイチャーがあったという記憶があるそうですが、このクイチャーフェスティバルをスタートさせて保存会を調べたところ、16団体まで減っていたというのを聞きました（多良間村、伊良部島のクイチャーも含めて）。現在この保存会自体はその16団体で20年近くあるのですが、今

年、開催に向けて出演への声掛けをさせていただいたところ、コロナの影響で活動を止めた、今後やる予定もないというところもいくつか出てきています。元々高齢化で平均年齢が上がっていくなか若い世代が一切入ってこないというのがコロナ前から見えていたのですが、コロナ禍で一気にそういった状況になっているようです。

私がクイチャーフェスティバルに携わった頃は、3つか4つの地域では子ども会も盛んに行われていたのですが、現在は少子化の問題もあって、子ども会も一切ない状態でクイチャーもなくなっています。

また、保存会の問題として、唄い手や地謡（じかた）の方が減ってきている事もあります。2002年のスタート当時は生歌でクイチャーをやっていたところがほとんどでしたが、今はCDがほとんどです。そこで私が引き継いだ実行委員のメンバーで協議をし、地謡のグループを1つ作って、不足している地域の唄や三線を引き継いでらどうかと各保存会に案を投げ掛けました。しかし、小さい宮古島でも各地域の方言に違いがあり、訛りや言葉自体も違うので、「よそ者には絶対唄えないよ」「地元の僕たちでも唄えないのに無理だよ」ということで、却下された経緯がありました。しかし、地域のクイチャーを守っていくためには、元々あった祭り等を復活させていこうと話がまとまりつつあります。今は携わっていないですが、実行委員としては今後協力していけたらなと思っています。

保存会の保存継承には、地域の皆さんの意識改革が大前提となります。実行委員としては、今できることをやっていこうと、第1回から立ち上げた創作クイチャーに力を入れて、若い世代にクイチャーを広げる活動を中心にしていこうとなりました。

世界中でエイサーをやる人は必ず踊れる曲として、「ミルクムナリ」という曲があります。

私には「世界中でいつかクイチャーを踊ってもらいたい」という夢があるので、ミルクムナリに近い、核となる曲が欲しいという事で、第14回目の時に、以前から親交のあった歌手の宮沢和史さんに相談し、「みるく世のクイチャー」という新しい創作の曲を、下地暁さんと共に作っていただきました。それですぐ振り付けをして第15回に初披露、翌年からその普及活動を始めました。まず、地元の小中幼稚園に出向いて、創作クイチャーと「漲水のクイチャー」という昔から踊られている曲の2つを軸に、ワークショップをしていきました。現在コロナ禍で、全然そういう活動ができなかったんですが、島内で16の保育園、幼稚園、小学校、中学校、県外でいうと宮崎、大阪、茨城、東京の方にも伺いました。

2019年には宮沢さんに「アルゼンチンにイベントで行くので一緒に行かないか」とお声掛けいただいたので、これはいい機会だということで、2週間弱行きました。1日ずつ、アルゼンチンの県人会や、祭り太鼓の支部のエイサーのチームなど約300名、沖縄県人会の方々を中心に、創作クイチャーと漲水のクイチャーのワークショップを行ってきました。

クイチャーフェスティバルの取組としまして、これまでエイサーのワークショップも多かったんですけど、今年11月に大阪の方の中学校の修学旅行の団体から「クイチャーを教えて欲しい」ということで、そういった大きな依頼が初めてでして、凄く嬉しく思っています。エイサーではなくて、クイチャーを教えて欲しいということで依頼もきています。

クイチャーフェスティバルが、第15回大会まで無料の屋外でやるイベントでしたが、私が引き継いだ後に、もっともっと広めていくためと、観光客にも観ていただくようなエンターテインメント性を持たせたイベントにしようということで、第16回からは屋内のJTAドームで照明を使ったイベントに切り替えて

有料にしました。初年度から約80名の観光客の団体が、旅行会社を通してまとめて観に来てくれるという実績もありました。その後すぐコロナになってこの2年間やってきていませんが、今年も美ら島沖縄文化祭の関連事業となっていますので、たくさんの人にクイチャーを広める活動をしていくイベントにしていきたいなと思っています。

これまでの活動報告でした。以上になります。

【波照間委員長】

前里さん、どうもありがとうございました。それでは、委員の方々から、前里さんにご質問ございましたらお願いします。

【いのうえ委員】

各地域のクイチャーの保存会の皆さんは、クイチャーフェスティバルにどのように関わってらっしゃるんですか。

【ゲストスピーカー：前里昌吾氏】

有料化してからは少し賛否がありまして、屋内にしたことにも反対意見がありました。「クイチャー踊りは外でやるものだ」というご意見が沢山出て、屋内になってからは参加していただけないところも増えました。昨年は通常のフェスティバルができなかったのですが、フォーラム形式で保存会の皆さんに声をかけて会場を借りて実施しました。それまでも屋内にした経緯は話をしてきましたが、有料化した事で、お金を保存会が出さないと出れないことになったという誤解が起こっていたようです。

今、コロナ禍で活動していない団体が増えたということもありましたが、一応6団体は参加したいという声はいただいています。

【山里委員】

この会議は、沖縄の文化とか伝統、言葉など色んな問題、歴史とかを、学校教育の中で取り入れていこう、その為にはどうすればいいかという議論をしてきたんですが、今日いただいたチラシを見ますと、小学校やこども園、保育園が入っていますが、私の子ども達も40代になっているんですが、子どもの頃は、学校でエイサーやっていたんですよ。宮古のクイチャーは学校の例えば運動会とか学校行事の中で取り入れられていますか。

【ゲストスピーカー：前里昌吾氏】

僕の子どもの時は、平良市漲水地区のクイチャーとして、「漲水のクイチャー」を踊っていた記憶はあり、平良市以外の城辺町や上野村でも、地元のクイチャーを踊っていたと聞いてるんですが、これが今まったく踊られていないということでした。子ども達へ創作クイチャーを指導には行くんですが、先生が転勤でいなくなると、次に繋がってないというのがこの数年で分かってきたのです。そこで宮古島の各学校に校歌遊戯があるんですが、それに代わる「校歌クイチャー」を作ってみようと、実行委員の方で各学校に出向いて、在席する子ども達に歌詞の案をもらったり、曲を作って振り付けも一緒にやっていく動きがあります。これは教育委員会にも打診中の企画なのですが、毎年継続してできないかなと思っています。

私が創作エイサーを始めた時には、沖縄本島でいう青年会エイサーをまったく知らない状態でした。エイサー活動をしていく中で、本来の伝統的なエイサーにも興味を持つようになったのと同じように、まずは子ども達にはその創作クイチャーから入口で入ってもらって、いずれは、「何でクイチャーが宮古島に誕生したのか」というのも含めて継承していきたいらなと思っています。

【波照間委員長】

民俗芸能を研究していらっしゃる久万田さんがいらっしゃると思いますので、久万田さんからご質問なり、各地の民族芸能との関わりから何かお聞きしたい事あるいは、こうしたらいかがかという事はございますか。

【久万田委員】

私はクイチャーフェスティバルをカママ嶺公園でやっていた頃から注目していて、4、5回は観に行っていると思うんですけども。その頃は下地暁さんが実行委員長をされており、規模も大きく、伝統クイチャーと創作クイチャー以外にも獅子舞や民謡を含めた多彩なプログラムで、40、50も出場団体があったんじゃないでしょうか。感銘を受けたのは、伝統クイチャーと創作クイチャーが交互に出演するんですよ。伝統クイチャーは保存会主体で年配の方が多い。クイチャーは物語的な詞章で歌詞が難しい。子ども達はあまり伝統クイチャーは踊れないのでポップスを伴奏にした創作クイチャーに出演します。その前後には自分のおじいちゃんなどが出演しているので、両方の刺激になる。このように伝統と創作、民俗芸能がサンドイッチのように行われるイベントってなかなかないなと思って感動したんですね。沖縄でも、伝統エイサーと創作エイサーの問題がありますが、沖縄市で開催している沖縄全島エイサーまつりでも、それほど創作エイサーの団体は沢山出ませんので。今、沖縄県では2011年から創作エイサーの世界エイサー大会をやっており、今はコロナ禍で中断していますけれども。クイチャーフェスティバルも、伝統と創作の関わりを見られる非常に興味深い催しだと思って注目しておりました。

2003年にクイチャーが国の「記録作成の措置を講ずべき無形の民俗文化財」となった時

に、沖縄県が報告書を作成しておりますが、私はそこにクイチャーフェスティバルについて一本報告を書いております。ともかく、宮古でクイチャーフェスティバルが果たしてきた役割は非常に大きいし、宮古において伝統文化と創作の問題を考える上で非常に重要だと思います。

ひとくちに伝統文化と言っても、昔からずっと同じことをやっている訳ではなく、何らかの変化があります。私が初めてクイチャーを調査したのは1983年ですけども、その時既に三線とか太鼓を導入していたんです。その時色々お話を伺うと、日本復帰に際して、沖縄本島のエイサーなどに対抗できるようなパワフルな芸能にしなければということで、太鼓とか三線を導入したと。ただ、私が行った頃は、太鼓三線なしのやり方と、太鼓三線を入れたやり方のどちらもできました。2002年のクイチャーフェスティバルでも、太鼓三線を入れない昔のスタイルでやるような保存会もあって、未だに昔のやり方でできるのだ、と思って感動した覚えがあります。

それと1970年の大阪万博に、実は砂川クイチャーが出演しているんです。当時の新聞によると、宮古内部で「こんな単純な華も飾りもないような芸能を本土に持って行くのは恥ずかしい」という意見や「いや、これが伝統文化なのだから自信をもってやるべきだ」という意見の論争があったそうです。これは神戸大学の大学院生の研究から私も知ったんですけど。宮古の中の伝統と言っても色々変化があります。クイチャーは、宮古節などのお祭りで行うのですけれども、それ以上に雨乞いが非常に重要なんです。雨が降らないと踊って、それでも降らないとまた踊って、とにかく雨が降るまで踊り続ける。ところがいまや宮古には地下ダムができ、住民一人当たりの水道使用量は県内で宮古島市が一番多いぐらいだと思います。そうなるクイチャー

を雨乞いで踊る必要がなくなるわけですよ。このように伝統クイチャーでも様々な変遷があり、しかもコロナ禍により保存会もどんどん減っているということなので、伝統のあり方も、ある意味で曲がり角を迎えている時期なんじゃないかと思いました。

今年も21回目をやられるということで、大変注目しております。伝統の掘り起こしも創作の方も、盛り上げて頑張っていたきたいと思います。私のコメントは以上です。

【波照間委員長】

どうもありがとうございました。このクイチャーフェスティバルっていう、いかにも宮古の人しか発想しない、エイサーは沖縄全島でやりますけど、地域の芸能を一つの起爆剤、核にして、20年近く継続できるというのは、そうそう沢山はないと思うんですね。そういう意味でまさに宮古の方々の心意気がこのクイチャーフェスティバルにこもっているというふうに思います。そういう意味でやはり、継続することが非常に重要だとお聞きしながら思っていたんです。運動会なりでこのクイチャーをやることによって、子ども達の中に宮古の郷土芸能というのが身に染みるし、新たな創作という方向にまた動いていくこともあるかと思います。必ずしも道は平坦ではないと思うんですけども、前里さん、どうぞ今後とも宮古の為に頑張っていたきたいと思います。今日は本当に貴重なお話をいただきまして、ありがとうございました。

【ゲストスピーカー：前里昌吾氏】

ありがとうございました。

【波照間委員長】

それでは、前里さんのお話のあとでございますが、事務局の方でヒアリングをいくつかして来ておりますので、そのヒアリング調査

の結果を報告いただきたいと思います。取組事例の報告という事で、「教育現場で歴史・文化を継承する取組」と「伝統芸能・工芸等の新たな取組」についての調査報告を事務局からお願いします。

【事務局】

資料2、参考資料2 説明 (省略)

【波照間委員長】

どうもご苦労様でございました。時間が随分おしてきておりますので、本来でしたらヒアリングの結果と個別に先生方のご意見をお伺いしなきゃいけないところもあるんですが、重要な議題がこれから残っておりますので、その議題を取り上げる中で個別的なことについてもご質問、ご指摘いただくという事で次第に従いまして、資料3に基づいて、この万国津梁会議の知事への提言の取りまとめの方向性についてのお話をさせていただくという事にしたいと思います。

事務局から先ほどの調査結果と昨年度の取りまとめ、中間報告を踏まえて、今年度どのようなかたちで提言の取りまとめをしていくべきかという事について、事務局からまずご説明いただいて、後で委員の先生方から議論させていただくことにしたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

4. 議 論

【事務局】

資料3 1～4ページ説明 (省略)

【波照間委員長】

どうもありがとうございます。この資料3に記されているように、今年度は提言をとりまとめる必要があるため、資料3の4ページにあるような中間報告の提案①、②、③を土台に「調査結果から追加した視点・項目」を追加して「琉球文化を一体的にとらえ戦略

的に進めるための提言」と持っていきたいという事のようにございます。今日は色々ご報告などいただきましたので、それも含めて、提言書の取りまとめをどういった方向に持っていくか、そのお話をさせていただきたいと思っております。私なども再三話をしてきたことについては、いわゆる抽象的な文言で終わらせてはいけない、より具体的で県の施策として実際に5年先、あるいは10年先にはしっかりと成果としてものが残るといえるのでしょうか、仕事が残るような提言をしなきゃいけないというふうに考えておりますので、そういった琉球文化のルネサンスという言葉そのものが非常に抽象的なものですから、それをどう肉付けするかという点に留意しながら、先生方の方からご意見をお出しいただければと思います。よろしくお願いします。

【上里委員】

ありがとうございます。さっきの神谷先生と山内先生のヒアリングについては、僕も一緒に参加して、色々とお話を聞いたんですけども、大変示唆に富むお話でありました。その中で特に印象に残ったのが、神谷先生が「県ができることは何かというと、市町村の取りまとめ役である」というお話をされていたんですね。まさに僕はその点が今回の具体的な提言をどうするのかというところに繋がっていくような気がします。

資料3、4ページにあげられた様々な課題や視点、地域文化の継承や専門人材の育成とか、各市町村が具体的には現場で行っていくわけですけども、例えば県はそれをサポートというかアシストするような。例えば各市町村でバラバラに行われている文化行政や革新的な取組の情報を一括で共有できるような役割を県の中に与えて、各市町村がそれを全体に状況を把握できるようなかたちにしていくとかですね。

例えば、学習教材ツール、カリキュラムのモデル化の話も出ていましたけれども、これを各市町村が一から作ったら大変だと思うので、県が今まで議論していった中で明らかにされてきた、ある程度こういうふうになればいいという型を県が作り、それを各市町村がアレンジして作れるように情報を提供していくとかですね。そうした情報を市町村にアドバイスする役割や人材バンクの話も出ましたけれども、それこそ県が一括で管理して各市町村に派遣していくとか。あともう一つは、地域リーダーの育成塾なんかも神谷先生はされているということでしたけれども、志多伯地域限定でされていたのですが、そうした地域のキーパーソンを育てるような塾のようなものを、県の機関で育成して、様々な個人や団体を講師に、そうした人材を育てて各地域に派遣して、彼らが地域の実働部隊になる、というようなかたちにも県ができる役割だと思いますし、今回あげた目標や課題解決の為の担当部署を県に設置するといった事を今後具体的に詰めて議論していけばいいのかなと思っています。イメージとしては、しまくとぅば普及センターが現在ありますけど、例えばそれをもっと大きな包括するような琉球歴史文化普及センターのようなかたちを県が設置をする等です。

今後「県ができる事は何か」という視点で具体的な政策を進めていけばいいなと個人的には思いました。以上です。

【波照間委員長】

どうもありがとうございました。簡単に言うと横断的な文化施策に関する情報の発信であったり、あるいは取りまとめだったりというようなセクションを作るべきではなかろうかというお話だったと思います。これにとられる事は必要ないかと思いますが、ほかの皆さんの方からもご意見を。はい。どうぞ久

万田さん。

【久万田委員】

資料3、4ページ、提言書の枠組について。真ん中の調査結果から追加した視点項目を見ますと、専門人材の育成と普及については、これまで空手を今大学で教授している機関がないと思うので課題だと思います。芸能や工芸であれば私のいる県立芸術大学が担ってます。歴史文化教育との連携や地域文化の継承と書いてありますが、問題は要するに文科省の学習指導要領の方向性だったり、地域の小中学校の先生が全然地域の文化を教えられないということが問題です。

岡山県の事例では、お金を出してその地域の文化協会のような先生を派遣してくれたりしている。学校の先生が地域の歴史や文化を教えるようにできていないのが、日本の教育システムです。今も「情報」という新科目が入ってきたりしています。要は沖縄県としてのアイデンティティをどう教え育てるのか。今日前里さんにお話いただいたクイチャーフェスティバルだって、宮古の人間の文化的なアイデンティティ、歴史的なアイデンティティをイベントを通じて子ども達に養っていくという課題があると思うんですね。だから、ある意味では、この歴史文化教育との連携とか、地域文化の継承というのは、先ほど委員長がおっしゃった事で言うと横断的は横断的だけど、必ずしも今の学校教育は、そんなふうに横断的にできていないので、それをどう柔軟に地域にいる指導のできるお年寄りとか人材を上手く使って横断的な取組にできるか。例えば、宮古なら宮古の地域のアイデンティティ、八重山なら八重山の地域のアイデンティティ、沖縄県なら沖縄というもののアイデンティティというものをしっかり次世代に伝えていくという大きな目標、次世代への継承がやっぱり大事な事なんじゃないかとい

うふうに感じました。以上です。

【波照間委員長】

どうもありがとうございました。ほかにいかがでしょうか。

【いのうえ委員】

県で既に予算が付いて動いている事業って沢山ありますよね。そことの紐づけ、連携みたいな事をできると、新しく部署を作るとか横断的に今までやった事のない事をやろうとするとハードルが高いので、盛り込めるようなものを具体的に入れていくというのはちょっと話が細かすぎますかね。例えば、工芸の調査事例報告（参考資料3、10 ページ）で、宮古上布の話がちょっと出てきていて、資料に「苧積み」と書いてありましたが、「苧積み」で「ぶーうみ」といいます。結局流通問題なんですよ。おばあちゃん達は何名か集まって、ゆんたくしながら糸をうむっていうのをやってきたんですけど、高齢女性達のお小遣い稼ぎにはなるけれど、若い人だとコンビニの時給より低いので、その仕事をしようという気になれない。今、着物の流通で誰が儲けているのか、地元にお金が落ちていない仕組みになっている。それをどうにかする為に、例えばものづくり振興課でやっている施策はすでにあるわけで、機能してるかどうかは別として、そういう施策と連動するような紐づけができれば、既にある予算の執行体制を活かして、より戦略的な動きができるんじゃないかなと思いました。以上です。

【波照間委員長】

どうもありがとうございました。これは県庁内部の組織の問題とも大いに関わっているかと思いますが、一つの提言としてあるべき姿かとは思うんですね。これは我々のこの万国津梁会議そのものが県の 21 世紀ビジ

ョンには載っていないけれど、重要な問題がいくつもあるということを既に確認しているわけですよね。そういう意味で紐づけという話がありましたけれども、「21 世紀ビジョンにはないけれども、このような重要な問題があるんだ」という事をここで提言していくという事が非常に大きな仕事だと私は実は思っております。そういう意味で、細かな事から大きな事まで色々、先生方、お知恵をお出しいただきたいというのが、私がここにいる役目だと思っておりますので、どうぞお話しいただきたいというふうに思います。

嘉数さん、芸能の話で、山内昌也さんのデザイン研究室の 1×1 の話であるとか、神谷さんの芸能の人材の問題、芸大の琉球芸能専攻を卒業した人達の活躍の場をどう確保していくかというふうな問題とも絡んでいると思うんですけども。琉球芸能の将来を間違いなく担う、20 代 30 代の方々の活躍の場をどう担保していくかという大きな問題があると思います。そういった事についてお話しただければと思いますがいかがでしょうか。

【嘉数委員】

芸能の立場からお話させていただきますと、例に挙げていただいた山内先生や神谷先生の話がありましたが、ちょうど 40 代 50 代になるか年齢層です。大変なのは、これまでと芸能を取り巻く環境が非常に大きく変わってきている状況だと思います。戦後～復帰にかけて、先生達が熱心に後継者育成に力を入れて、なおかつ歯を食いしばって守ってこられたという大きな情熱の下で、今の私達世代にきているというのを非常に強く感じつつ、また、その中でこれまでと違った色々な挑戦であったり、チャレンジというのできるような環境になりつつあるというふうに感じています、その中で、山内先生のような 1×1 のような新しい挑戦、提案であったり、色んな方向か

ら舞台芸能に関しても様々な取組がなされている状況ではあると思いますが、ただ正直言って大きな課題ではありますが、まだそれだけで生計を立てていくことはできない中で、非常にまだまだ苦しい思いをしながら歯を食いしばってやっている方が本当に多くいらっしゃるという事です。それに関しては、私自身も全面的に行政が県の力だけを頼ってはいけないとももちろん思っていて、自分達の好きなものをしっかりと繋いでいく、好きな事をしっかりと伝えてあげたい。次の世代にも誇りを持って伝えてあげたいという信念があって、多くの実演家が演じている芸能の世界だと思いますが、大切な事はもう皆さんよくご存知の事で、これだけ素晴らしい文化が沖縄にはあるんだという事は誰にとっても当然のことで、何かあれば事あるごとに沖縄県は、「沖縄の文化」というのを非常にトップのような、独自の文化を持っているというのは、一番真っ先に文言でもでてくるところではあります。それをどういうふうに上手く生かして繋げていけるかという面では、今日の話聞いていて、先生方の意見とも繋がるかもしれませんが、やっぱり文化行政というところは大変大きなキーワードになってくるんじゃないかなと感じました。物凄く大胆な事をしていくという事でもないかもしれませんが、上手く回していけるような仕組づくりというのが、まだできる、工夫をする余地が沢山あるのが沖縄県じゃないかなと思っています。

沖縄はこれだけの大きな文化があるわけですから、他府県と同じ文化行政では、もう間に合わないというのが正直な意見で、だからと言って、どこの行政を参考に真似したらいいかという、恐らくそれは参考になるところはないはずで、だからこそ、ここから作り始めていかなければいけないので、そういうところが整っていくとお互い、今あるものを

上手く生かしていけるような仕組づくりが整ってくると。将来を担う人材育成であったり、また、伝統文化の継承を含め、発展に繋がる創造的なところも、明るい将来に繋がっていくためには、仕組づくりが今後非常にキーワードになってくるんじゃないかなというふうに感じました。ありがとうございます。

【波照間委員長】

ありがとうございます。工芸にしろ、芸能にしろ、歴史文化にしろ、日本の中でこの沖縄と同じような豊かさを持っている県や道、府はないと、その自負は私の中にもあります。その意味でまさに、万国津梁会議は、そういった何も類例のないところで我々は何を作り出していけるか、というそういった事が、私達がここで果たすべき、提言すべき事柄だと思っています。非常に同感でございます。

どうぞ山里さんお願いします。

【山里委員】

今の嘉数さん、それから委員長のお話に結びつけてちょっと申し上げますけども、非常に荒っぽい話になるかもしれませんがね。現代に入って、お互いに地球の在り方、世界の在り方がもっと分かるようになると普遍性という言葉が出てきて、ほかのところを勉強するのが一番いいなと、普遍というのを勉強しなきゃいけないということになってきて、自分が住んでいるところの知識というのがあんまり重要じゃない、自分達の生活の在り方というよりは、もっとほかにとっくに現代的な素晴らしい合理的な進んだ先進的なものがあるんじゃないかという考え方が強くなっていく。教科書も、そういう考え方を反映するかたちで、どちらかというと自分達の今いるところ、足元っていうのがあまり教えられなくなってきたというのが大きい流れじゃないかと思っています。それがグローバルゼーションに

繋がっているわけですが、それへの反動として、じゃあもう一回足元、場所に戻ろうじゃないかという動きが出てくる訳です。それを今、嘉数先生とそれから波照間委員長がおっしゃった事と繋がってくるんじゃないかと思えます。お二人がおっしゃった事を日本の中で当てはめると、沖縄は二重のハンディを負う事になるわけですよ。ただ、おっしゃっているように、ほかの所の例というのはあまり沖縄の役に立たないかもしれない。やはりどうしても自分達なりの教育の仕方、システムというのを作り出さないといけないという事がでてくるんじゃないかと思えます。これが第1点ですね。

それから第2点なんですけども、沖縄アーツカウンシル（公益財団法人沖縄県文化振興会）がありますね。私はカリフォルニアに5年いたんですが、カリフォルニアのアーツカウンシルは、年間3千万ドルの予算でやっている。私がいたのは1980年代90年代ですので、だいたい30億円ぐらいでやってるんですね。大変な予算なんですけども、カリフォルニアはもともと面積自体が日本がすっぽりと入るような大きいところで、世界の中でも非常に突出した経済力を持っているところなんです。そこが3千万ドルの予算でもって文化行政をやっている。これはカリフォルニアアーツカウンシルというんですが、そのメンバーが例えば、フランシスコ・ポロであるとかです、映画ETでお医者さんの役をしたピーター・コヨーテであるとかです、そういう方々が一生懸命に考えているわけです。そういう意味でも、沖縄アーツカウンシルが今やっていることは、私達がやっていることと非常に近い。近いんだけど、線引きがまだ曖昧になっているところがあります。そして同時に、沖縄アーツカウンシルの規模では小さすぎるんじゃないかなと思います。沖縄文化について色んないい事をやってはいるんで

すが、もうちょっと大きくダイナミックにやってくれないかなと。更にそこに公文書館まで一緒に入ってくるというのが、ちょっと重いかなという感じがしています。文化振興であれば、もう少し絞ったかたちで、もう少しダイナミックになれるように、規模を大きくしてやっていただけたらというふうに思いません。以上です。

【波照間委員長】

どうもありがとうございました。沖縄県文化振興会の役割という事についても考えていかなきゃいけないという事だと思えます。

大田さん、八重山の立場や宮古の立場から何かございますか。

【大田委員】

専門人材の育成と普及というのがあるんですけども、専門人材というと、これは何をイメージして言っているのか僕はよく分からないんですよ。例えば石垣などですと、お年寄りしか分からない歌とか行事とかあって。そういう人達がそれらの専門家だと僕は思うんですよ。そういう人達を大切にしないと、地域の文化継承というのはできないと思うし、更にその専門人材の育成とか普及ということはできないと思います。それは、もう本当に遅いというぐらいかなと思うんですけども、例えば地域の年中行事を含めて、育成する軸のようなものを作っていくと。そして、その中にはお年寄りと若者達が参加して、その軸を作りあげていくと。そういう中でしか専門人材の育成というものはできてこないだろうし、それがなければ地域文化の継承というのはできないと思います。県がやるのは何かではなくて、これはもう地域の人達が本当に真剣になって考えないと、ダメじゃないかなという気がしますね。

そして、県に期待するのは、宮古・八重山

に王朝文化とは違った文化があるので、それを認識した上での祭祀とか生活全般の専門学校や大学みたいなものを早く作ってくれないかなど。それがなければ、いずれみんな、王朝文化の華やかさに飛びついて、なくなってしまふんじゃないかと思ひます。

文化の本質とか書かれています、何が本質かというのは、私は自然とか神々を敬う心じゃないかなど。ところが、その自然が平気で今壊されていっているんですよ。だから、そういうことも含めて学ばないといけない。ただ、やればいいというものではなくて、そこをなぜそのところが必要か、何でそこに入っはいけないのか、なぜそこで木を切っはいけないのか、なぜその時期に海に入っはいけないのかというようにことをきちんと教えていくことが必要じゃないかなど。僕はこれしか宮古・八重山が生きていく道がないのかなというふうには考えてます。以上です。

【波照間委員長】

どうもありがとうございます。宮古、そして八重山のこの2つの地域は、いわゆる南琉球と言われて、沖縄、そして奄美諸島の北琉球の文化と対照的なかたちで存在する2つの地域です。この宮古・八重山の文化、これは今、大田さんの話では王朝文化に対するまさに伝統的な庶民文化が色濃く残っている地域で、この地域の文化的特性をしっかりと伝えていくこと、これは最終的には沖縄文化の多様性を、我々が享受することに繋がっていくというふうな理解ができるというふうには思ひます。

コミュニティカレッジの話については、山里委員も大田委員、私なども同調してきているところがございます。決して諦めるわけにはいかないだろうと思ひしております。前里さんもいらっしやいますので、宮古の方にもこういったことが万国津梁会議で話されていた

という事を是非、色んな所で話していただき、声にしていただきたいと思ひます。富田さんからは後でまたお話いただきたいと思ひますが、もう一つの議題について事務局から説明をお願いします。

【事務局】

資料3 5、6 ページ説明 (省略)

【波照間委員長】

どうもありがとうございます。提言書の取りまとめの為には、どうしても、もうちょっと揉まなきゃいけないという事ですが、全員で集まってというのは、時間的には無理だろうという事で、その為には特化したワーキンググループを作りたいという計画でございます。数名5、6名ぐらいでのチームを組みたいというふうには考えておりますが、これにつきまして、皆さんから何かございますか。富田さん何かございますか。ご希望とかこうあって欲しいとか。特にございませんか。

【富田委員】

ワーキンググループの話ではないんですけど、今日、先生方の話も色々伺って凄く思っているのが、具体的にどうするかみたいな事だと思ひますね。それぞれの分野で皆さん、琉球文化を次世代に繋いでいきたいという思ひは、強さの度合いこそあれ、皆あると思ひますよ。でもそれを具体的な方法があるところはいいんですけども、思っているけれどもどうしていいのか分からないという事が非常に色んな所で起こっていると思ひますね。例えば、今日何度も出てくる「子ども達」へのところなんですけど、今日実は私、朝に南部の小学校に行っ来て、丁度この話をしてきたところだったんですけど、先生方の中に沖縄の歌や踊り、しまくとぅばを次世代に繋いでいきたいという思ひが凄くある。

でも、どうしていいのか分からない。あと、学校内に教える人は誰もいないと。そこで今利用しようと思っている文化庁がやっている文化芸術による子どもの育成総合事業というのがありまして、本当に一例でこういうプロジェクトが沢山あるんですよ。でも、こういう使えるプロジェクトがあるっていうのを学校現場がなかなか知らなくて、知っていたとしても、それをどんなふうに活用しているのかが分からない。さらにはそれを活用するためには凄く長い申請書を書かなきゃいけないっていう事で結構ハードルが高くて。思っているんだけど、一歩踏み出せない。一歩踏み出せたとしても、それをまた更に歩み続けていくだけの体力とか、あとは経済力みたいなものもきっと必要だと思います。例えば、先ほど出したこの文化庁の例だと、学校にその講師の先生を、地域の琉球舞踊の先生や、唄三線の先生をお呼びして、本物の芸能を見せて、更にはその芸能についてのレクチャーをして子ども達に体験をしてもらって、全てのその派遣費用というのは文化庁が負担するっていうものなんですよ。先生方は「こんなあったんだったら、前から使えば良かったさ。でも、知らなかった」と。こういう沢山ある情報をどこかにやっぱり取りまとめて、それを学校現場と繋いでいく、更にはどういう地域のどういう方に学校に来ていただくのがいいかという、コーディネーターというのが、先ほどから話も出てるところが必要だと思うんですけども、その時の窓口を、先生がおっしゃったみたいに何とかセンターがいいのか、それともアーツカウンシルがいいのか、それとも県庁の中にあるのかとか、どこが主体的に行うのかというのはとても重要な事だと思いますので、是非これから提言を取りまとめていく中で、私達の意見として、こういう事は教育委員会がやった方がいいんじゃないか、こういう事はアーツカウンシルが

担うべきじゃないかっていう提言は、取りまとめていくべきではないかと思いました。

【波照間委員長】

どうもありがとうございました。もう、15分回っております。私自身も例えば、今日の報告にありました、教育課程特例校制度なんていうのは今回の動きで初めて知りまして、やはり情報が不足している、施策があってもこれが上手く活用できない状況があるということ。また、富田さんの話もそうだったと思います。そういう意味で、最初に話を下さった上里さんが指摘しておられたような「情報を一元化して、そしてしっかり沖縄全県下に伝えられるようなシステムを作っていく」というのは、必要なことだろうと思いました。

もうちょっと話したい事もおありかと思うんですけども、予定の時間既に15分以上オーバーしております。今日は本当に活発なご意見をお出しいただきまして、いよいよ提言書の検討に入っていく準備が着々と出て来たかなというふうな感じを持っております。それでは、今日の議事録につきましては、先生方の方に確認の文書が行くはずですので、今日ここで上手く整理できなかったとか、これを言うべきだったのにとというような事がございましたら、この議事録に付け足していただいて、提言書に繋げていけるようにしたいというふうに思います。それでは、これで私の役を終わりにさせていただきます、進行を事務局にお返ししたいと思います。よろしくお願ひします。

5. 閉会・事務連絡

【事務局】

波照間委員長、委員の皆様、本日はどうもありがとうございました。事務局としても、かなり色々悩みの多いところであるんですけ

ど、今日かなりいい意見もいただきました。
やはり事務局だけで取りまとめていくのはかなりハードルが高いかと思っておりますので、繰り返しになりますけれども、骨子案の取りまとめの作業につきまして、また委員長と相談させていただきながら進めて参りたいと思います。また決まり次第その状況については、各委員の方にお知らせさせていただきたいと思いますので、よろしくお願いたします。また、次回の会議につきましては、11月中旬から下旬の開催予定をしております。詳細につきましては、後日各委員のご都合を確認し、決定したいと思いますので、引き続きご協力よろしくお願い致します。

それではこれをもちまして令和4年度 第2回「琉球文化ルネサンス」に関する万国津梁会議を終了させていただきます。

本日はどうもありがとうございました。